

書 評

岡本五十雄 著

札幌発リハビリテーション物語

加倉井周一（東京大学医学部附属病院リハビリテーション部）

昨今では医者や看護婦、さらには患者の立場からみた医療に関する書籍が数多く出版されている。リハビリテーションの領域においても患者の体験談の書籍はみかけるが、医者と患者との関わり、多くのスタッフによるチーム内での議論や患者・家族が障害を受容していく過程での医療スタッフとのトラブルなど実践的なリハビリテーションについて書かれた書籍は恐らく本書が初めてであろう。

岡本五十雄氏は1968年に札幌医大を卒業され、現在勤医協札幌丘珠病院副院長としてリハビリテーション医療の第一線で活躍しておられるが、本書の後書きにもあるように氏の実際に体験された脳血管障害と脊髄損傷の十数例に脚色を加えてまとめられたものであり、また氏のそれまでの患者への対応やチーム内でのトラブルに対する反省の意味もこめら

れている。一読してきわめてさわやかな印象をもてたのは、恐らく氏の患者や家族を見守る暖かな人間性によるものと考えられる。

ここ数年いわゆる「リハビリテーション医療」と「リハビリテーション医学」の乖離の大きさをひしひしと感じているが、このような書籍が広く一般社会で受け入れられることはとりもおさずリハビリテーションの積極的なPRにつながるものと確信する。

私は個人的にも氏と親しくさせていただいているが、氏がこのような文才をお持ちとはこれまで全く知らなかった次第である。今後の氏の一層のご活躍を期待したい。

（四六判 237頁 1,600円（税込） 1993 桐書房 刊）